

広島俳句倶楽部

令和五年六月作品集

春 知佳子

俳句を始めて良かったことの一つが、植物などの名前を知ったことです。道端や公園の花や木を見て、名前を調べたり人に教えてもらうことで、それまでなんとなく見ていた花や木の違いを知ることができ、親しみが増してきました。季節集にある花や木を、よく歩く道に偶然見つけた時には、とても驚き、幸せな気持ちになります。身近な四季の自然を楽しむ、かけがえのない喜びを手に入れました。

雨匂ふ初音の道を上りたる

糸桜分ければ朝の雫かな

水音の近くに三条躑躅かな

深山躑躅ところどころに人動く

露晴れて山の残雪現はるる

手を伸ばすすぐその先に春の月

小手毬の花に川風吹きにけり

花公孫樹その向うには昼の月

近寄りて枝先触るる花楓

黄水仙畑の境あいまいに

《作品鑑賞》

すみれ

知佳子さんの俳句の感性にはいつも驚かされ、(こんな観点を捉えている)と感心させられる。この「春」という作品は、春の情景と花で瑞々しい様子が詠まれていて、美しく喜びの溢れている作品となっている。

雨匂ふ初音の道を上りたる

先ず(雨匂ふ)が知佳子さんの感性である。

糸桜分ければ朝の雫かな

朝の雫を持ってきたことにより瑞々しい作品となった。

深山躑躅ところどころに人動く

ところどころと表現することで情景が鮮明になった。

黄水仙畑の境あいまいに

畑の境あいまいに、という観点で俳句ができるという発想に魅了させられた。良い刺激を頂き、いい作品に出会った心が洗われた。

山莊 辻純江

私が俳句を作るようになったのは、主人の転勤で、東京から長野県諏訪市に暮らすようになった時、友人に誘われて小さな句会に参加したことが始まりです。自然豊かな地で、楽しい仲間と毎週、句会を開き、俳句の魅力に引かれていきました。再び、東京に転勤になった時、諏訪を去りがたくて小さな山莊を手に入れ、通うようになりました。それから三十五年、俳句会はなくなりましたが、今も、年に数回、山莊に通っています。

桜葉降つて山莊開きけり

百千鳥蓼科山の穂やかに

諏訪湖へと流るる川や葦の角

石楠花の花の咲きたる休暇かな

落葉松の若葉朝食外で取る

林檎咲き諏訪湖に波の立ちにけり

雉鳴くや鳳凰三山荒々し

蛙鳴く水田に映る駒ヶ岳

鶯の綺麗に鳴くや四月尽く

山莊を閉づ鶯に別れ告げ

《作品鑑賞》

松田裕子

句会ではじめて辻さんにお会いした時、俳句に精通した方だと直感いたしました。諏訪に山莊をお持ちとのこと。人生を謳歌し、美しい大自然の中で感性豊かな俳句を生み出しておられます。

桜葉降つて山莊開きけり

桜葉が降る頃はようやく諏訪も春を感じる季節になり、待ち望んでいた山莊を開けることができます。その喜びを、この素直な句からしっかりと感じとることができます。

百千鳥蓼科山の穂やかに

春から夏にかけて鳥たちの恋の季節です。美しい声であちらこちらで囀っています。その中で蓼科山は、若葉輝く山となり、いつもとかわらず穂やかな美しい曲線を見せているのです。この絶妙な対比が上手いと感じ入りました。

落葉松の若葉朝食外で取る

落葉松林は本当に美しく、自然美の醍醐味を感じます。春の若葉、秋の紅葉と、見る人に感動を与えます。若葉を見ながら外での朝食。なんと贅沢なことでしょう。自然に魅せられた作者の喜びを感じます。

山莊を閉づ鶯に別れ告げ

鶯は春から初夏にかけて美しく鳴きます。鳴き始めた鶯に未練を残しながら、山莊を閉じるのです。また来るからねと声をかけて。

花の雨吉備の家々濡らしけり

山藤に風強くなる国ざかひ

行く春の神奈備山を歩きけり

紫蘭へとよき雨音の大路かな

大路より間道岐かれ花うつぎ

河骨の池見て通る大路かな

えご咲いて定かならざる大路なり

夕焼の鬼ノ城へ向き帰りけり

倭人伝読む目転ずる青葉かな

壬申の乱に同ふもの夏灯

夏の月流るる雲の先にあり

短夜や好きな映画を観てゐたり

二人して道駆け渡る浴衣の子

吾へ向き咲ける柏葉紫陽花よ

庭仕事リストバンドで汗拭ひ

花を挿すギヤマンの横ラジオ鳴る

宵星の傾けば鳴き不如帰

窓上る守宮目で追ふ廁かな

近道をせむと入りたる木下園

大楠の先に広がる夏の海

雉鳴いて畦道の風強くなる

風吹けば景裏の白き春の山

つばくらめいく度も橋を潜りけり

咲き昇る藤へと朝の日の差せる

春惜しむひととき雨の音を聞き

清和かな朝の花壇の香り吸ふ

若葉みな五月の雨に濡れにけり

著莪の花道はまもなく下り坂

紫陽花や今日はひねもす雨が降り

日輪へあまねく咲ける山法師

佐保光俊

村上正人

高尾ひとみ

竹馬の友老いて寄り合ふ草の餅

新緑の森にあまたの鳥騒ぐ

観覧車ゆつくり廻る薔薇の風

ジャスミンの少しづつ咲く朝かな

雨の中窓より眺む濃紫陽花

愛犬遊ぶ箱にあぢさる敷き詰めて

庭に来て夕暮れ色の揚羽蝶

夕餉どき今日も来てる四十雀

幸せと思ふ早春の夏祓

掬ひ来し金魚出窓に飼うてをり

あざみ

水伝ふ花茎伸びやか梅雨入かな

あぢさるや塵ひとつなき地藏堂

隣人の待ちたる薔薇の咲きにけり

さざ波のひとつひとつに清和かな

祖父祖母も入りて萼を摘みにけり

菫菫煮ゆ湖からの風青し

患ひてからの生き方ジギタリス

各角に鹿煎餅に薄暑光

無骨なる吾子の踵や夏の原

不惑なる身の氣まぐれやあつばば

綾乃

春の山子は母を追ひ駆け出せり

チューリップ片側傾ぐ文机

春深し立ち並びたる白き幹

アスファルトに線引く匂ひ夏近し

石段に美術館の影初夏の風

黒揚羽木と木の間飛びゆけり

景桜をジョギングの人通り過ぐ

青空に一匹の蜂止まる如

麦の秋子の列づく児童館

父と子の買ひ物に行く五月かな

亜矢

出雲へと青景若景の山を抜け

古き温泉を囲み然なる青景山

露天湯の小さき水輪若景雨

川音の絶ゆることなき新樹かな

中腹の滝音を聞き休みたる

前山の余すところのなき青景

酢漿の花に近づく午後の道

母と行く社の道の著莪の花

窓の空眺めプールを歩きをり

病む犬を両腕に抱き星涼し

雀の子ここは我が家の駐車場

甚平や終活などと思ふころ

ハンモック聴くとはなしのクラシック

葦切や川と海との合ふ所

早々に雨戸を閉めし梅雨の雷

紫陽花は今を盛りと道狭し

FMの音量下げし夏の夜

一斉に時計回りの水馬

妙案を得た心地して昼寝覚

父の日や父を見上げし頃もあり

満月を見ながら春の宿に着く

満開の薔薇を散らして雨の降る

梅雨入かな庭にしとしと雨の降り

雨の中咲く紫陽花の青と白

紫陽花やひと雨ごとに色付きて

父の日のお菓子の届く下戸の夫

今年また庭に十葉咲きにけり

不如帰今宵は何処で鳴けるかな

あちらかと思へばこちら時鳥

枇杷の実に四五羽の鴉来てをりぬ

井藤希

栄吉

大畑恵

首夏の池一日かぎりの花咲いて

梅雨晴の空を青しと仰ぎけり

石段に蜥蜴の光る奥の院

袂はれし車へ舞うて竹落景

栗の花橋を過ぎれば生家なり

青柿の触るるばかりや蔵の窓

はらからと木橋を渡り螢狩

ほととぎす山家の朝餉すでに終へ

立葵艇庫を抜けて川の風

夕風や早も釣舟灯しをり

暁子

朝ぼらけ夏炉に櫓木足しにけり

引越の別れに庭の薔薇もらふ

書き写しまだ間違へて金魚玉

やるせなく凭るるデッキ星涼し

寝る前に見る三日月と夏の星

夏燕胸に夕日を受けてをり

十薬のはびこる庭に雨しきり

名を知らぬ木に響きけり時鳥

シート干し揺れて海芋の見え隠れ

らつきよう揺る大人は鍛子は両手

すみれ

紫陽花を見るとき雨の強くなり

手の届く高さに巣箱雨上がる

通り雨上がりし軒の鉄線花

雨霏肩に受けつ薔薇の門

目の前でふいに崩るる白き薔薇

蛇莓大樹の向うまで覆ひ

袋掛終へし木蔭に休みをり

いつまでも大城動かず雨催ひ

夏萩を分けて近道抜けにけり

夏萩や明りの点る母の家

知佳子

美容室ドアの真上に燕の巣

母と行く老人ホーム緑さす

母の住む施設に十の燕の巣

女の子蔓ゆつくり摘みにけり

男の子次々畑の蔓食ぶ

麻酔から覚めて窓辺に新樹光

病院の窓から見ゆる若葉かな

昨日から庭の桜桃色づいて

夏座敷祖母と婚礼写真撮る

緑蔭に結婚式の二人かな

玻璃戸より島々見ゆる立夏かな

夕暮の恋人たちや夏兆す

仰ぎ見てヒマラヤ杉の新樹なり

沙羅の花落つる青する日暮かな

ロンドン橋落ちたと遊ぶ薄暑の子

十階の窓に見る海五月来る

鶯鴉岡ふ空や夏の朝

緑蔭の一筋の道歩きけり

桑の実や手の届きさう届かざり

まくなぎや女が好む立話

若葉風受けながらする旅支度

花卯木ゆつくり上る石の道

つぎつぎと摘んでは干して蔵草

とうかさん行き来の人ぞろぞろと

とうかさん家族で通り賑はひて

お揃ひの浴衣で屋台覗きをり

群れ咲いて静かに揺るる杜若

緑蔭に風吹いてをり友を待つ

六月は町内会費払ふ月

無花果を供へて母を思ひけり

ちどり

辻純江

雲雀

四葩切るグリーンアイドモンスター

特別な紫陽花と知る家の裏

さみだるる音の消えゆく檻の中

さくらんぼ盛大に贅沢なタネ

無意味だけ残る籠なり紫蘇を摘む

植田照る自動運転の車

答えなく多すぎ落ちる火取虫

飛ぶ螢消える消えない選択肢

夏の川家と家との夜の谷間

露草の平凡な青レジ袋

ふじ女

つばくらめ二つの川の合流す

樟若葉ゆれて斑な影の揺れ

田舎道みどりみどりの中歩く

母の日や墓石の前にひとり居る

父が居て母が居て青芝の家

日向よき雨雫よき四葩かな

あぢさるロード守りたる老一人

景隠れに千の螳螂生まれけり

子かまきり枝に重なりぶらさがり

すててこや瘦せたる父の手術痕

松田裕子

麦秋や海より吹いてけふの風

用づる目に麦生の色の残りけり

雨蛙繭の新芽の色となり

こぼれ種緑り返しをり金魚草

荒れ庭の光集まる葵かな

名を知らぬ虫の出づるや草むしり

爪の土落として終る草むしり

夕映えの光の透ける釣忍

しやばんの香纏ひて午後シャワーかな

夜濯やあくび堪へて干し始む

村上理江

父の日や胡坐に二人子を乗せて
産土の山を映せる植田かな

帰り来て家はよきかな青藤

八つ橋に道譲り合ひ菖蒲園

昼からは影の濃くなる夏日かな

夏の蝶日差の中を上りけり

大小の島に架かりて瀬戸の虹

よく笑ふ女将の店や麻暖簾

尿にまた目覚めし夜半の夏の月

弟と交互に使ふ捕虫網

森口良樹

山寺の静もつてゐる花卯木

踝を濡らして歩く夏の雨

蓮青景洗うて雨の上がりけり

蓮青景向うに見ゆる阿弥陀堂

花びらを景に置く夜の蓮かな

菩提樹の花はいつしか終りける

夏の蝶寺の御堂を上りゆく

夾竹桃見れば揺れけり岸の道

ギヤマンの大皿の青風の吹く

桑門わかこ

バス曲がるたびに見えたる栗の花

母の声聞こえてきさう花蜜柑

花卯木峠を越せば日本海

賽銭を鳥居に投げて夏の旅

夏の旅船から観音岩拝み

真つ直ぐに一本の道青田風

浴衣着の深き肩上げ姉妹

美味そうと椿の若葉撫でてる子

さくらんぼ銜へたままにクイズ解く

高梨英子

指差して尋ねし木の名花棟

坂道の野の花を摘む日傘かな

田植機の前へ前へと通し鴨

満月が水面に映り余り苗

早苗田の水の匂へる勝手口

十薬の群れ咲いてゐる厠跡

手の届く辺りにしたり袋掛

峠越す島の学校印波寄す

五月雨や溜めたる録画再生す

山野ウタ

音もなく散り大輪の薔薇赤し

山裾に大きく揺れて今年竹

夜半より音の続ける五月雨

五月雨やソファに見たるサスヘンス

花蔭に座卓据ゑたる老舗宿

蘭座蒲団車座になり後妹会

涼風を受けて登れる山の道

大原良子

朝市の友の小松菜買い求む

杉落葉集めて風呂を焚き付くる

雨の日はあぢさるの花目について

七色に染まる紫陽花時思ふ

梅雨空やゲートボールの玉の音

黴々の腕に一匹蚊の止まり

須美れい

草刈の半分残し雨となる

城址の井戸に咲きたる雪の下

御朱印を頂き汗をぬぐひたり

夏の嶺越えたる僧や巴水の画

山裾の行く手行く手に今歎の花

熊谷ゆり子

子規の居し部屋より眺む夏の庭

話し声夜半まで続く蚊帳の中

境内の落ち梅誰か並べけり

青鷺の今朝も川辺に佇めり

子供らの川へと急ぐ炎暑かな

撫子

夏きざす髪をピンクに染めにけり

手毬花回り道して今日も見ろ

父の日のぬかるんだ道一人ゆく

多過ぎし千切りキヤベツ夫笑ふ

梅雨晴や揺るるシートと掛け布団

山崎桂子

道端の竹の子折りて煮しめにす

小判草花瓶に挿して揺れてをり

山法師雪崩のごとく花盛り

泰山木二輪見上ぐる駐車場

紀英子

走り梅雨赤の長靴履きにけり

ほととぎす鳴く声ひびき今は雨

種苗の胡瓜の双葉出そろひて

梅雨晴の月はゆるりと昇りけり

民

なめくじりブロック塀を上りをり

雨に濡れ額紫陽花の見頃なり

叢に見え隠れする小鳥かな

上島康子

畑一面深紅のポピー足止むる

大鉢に植ゑしトマトに実が三つ

梅の実のジュースを作る瓶洗ふ

河原静子

夏菜莢を一つ取つてと子のねだる

手習に行く道端の捻れ花

夫植ゑし葡萄の房の垂れ下がる

高嶋絹代

居るはずのない母居るか藤の中

噴水の落ちて水面に空のあり

峯雲に届くかのごと遂上がり

友岡崇山子

故郷へ帰路の風音麦の秋

留守番の読書してをり路の雨

正面の山は漲り青嵐

みさ子

玄葵人の声して日の当たる

見上ぐれば景隠れに梅大きな

百日紅二階の窓に兄の顔

美耶

伸びやかに主なき家の松の芯

六月や傘うねうねと続きをり

高きより翻り来し夏の蝶

やす保

あざさるや色や形の変はりゆく

梅雨晴や友と集へるレストラン

金川昭子

令和五年五月度作品集より

村上正人 私の選んだ十句

葉桜のそよぎそよぎて神の前	佐保光俊
野に咲けるそのままが好きすみれ草	高尾ひとみ
青葉の下まづ一礼す地藏堂	あざみ
夏近し患者に習ふ昭和歌謡	綾乃
桜まじ陸軍墓地に吹きにけり	井藤希
黄心樹の咲ける鎮守に礼参り	大畑恵
大瑠璃の来てゐる山へ窓開く	すみれ
今朝もまた薔薇の手入れの人動く	知佳子
山門を出れば渡りて青田風	桑門わかこ
頭垂れ微かに香る雨の薔薇	撫子

高尾ひとみ 私の選んだ十句

石楠花にある喜びと悲しみと	佐保光俊
雨上がり蜘蛛は再び糸を張る	村上正人
すれ違ふ人に会釈し若葉道	あざみ
夏近し患者に習ふ昭和歌謡	綾乃
若葉風朝を灯して経の声	暁子
大瑠璃の来てゐる山へ窓開く	すみれ
薔薇の庭今日も端まで門開く	知佳子
草むしり育てる草のありにけり	松田裕子
山門を出れば渡りて青田風	桑門わかこ
桐咲くや長元坊は山を越え	熊谷ゆり子